

主 題：新しい人生、新たなスタート

聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章17節

今日の礼拝メッセージのテキストとして選んだのは「コリント人への手紙第二5章17節」のみことばです。新しい年を始めるに当たって、今一度、信仰者である私たちひとり一人が信仰の原点に戻りたいと思うのです。ごいっしょにこのパウロが与えたみことばを見ていきましょう。17節「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」、この箇所でパウロは救いに与った真の信仰者について説明します。つまり、あなたのことをここに記しているのです。

(1) あなたはキリストのうちにある

これは救いに与った人を指します。パウロは「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」（ローマ8：1）と言いました。なぜなら、「キリスト・イエスにある者」は罪の赦しをいただいているから、つまり、救われているからです。同じローマ16：7にもこのように書かれています。「私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。」と。

(2) あなたは新しく造られた

この「造られた」ということばは被造物という意味です。「新しく造られた」とは「新生、新しく生まれ変わる」ということです。皆さんよくご存じのように、主がニコデモに対して話されたときに「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ3：3）と言われました。ガラテヤ6：15にも「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。」と書かれています。

教会にどれだけ長く来ていても、聖書のみことばをすべて暗唱したとしても、熱心に奉仕をしていたとしても、問題はその人がキリストのうちにあるかどうか、新しく生まれ変わっているかどうかです。新しく生まれ変わること、「新生」、それを経験したものが本当のクリスチャンです。ですから、パウロは「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。」と救いに与っている者のことを語るのです。

☆信仰者の具体的な特徴

パウロは実はこの5章から6章の初めにかけて「信仰者の具体的な特徴」を教えています。これから見ていきますが、どうして私たちがこのことを学ぶのかというと、もう一度、あなたが救いに与ったときのことをあなた自身で思い出していただきたいからです。そして、もし、自分の救いに確信が持てない、救われているかどうか分からないとそのように思っている人がいるなら、この学びを通して自分の救いを確認して、また、確信する機会となっていたいただきたいと願うのです。すでに話して来たように、この17節のみことばは「救いに与った人」のことが記されています。

*今日、私たちが学ぶその結論を言うなら、

新生したかどうか、新しく生まれ変わったかどうか、救いに与ったかどうかの決め手は、その人の「生き方が変えられたかどうか」ということです

A. 「新生」とは？

どれだけのことを知っているか、何を知っているかではなく、その人の生き方が変えられたかどうか、それが本当に救われていること、新生したことを明らかにするのです。ですから、パウロはこう言います。17節の続きを見てください。「古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」と。注目していただきたいのは、ここに二つの形容詞と二つの動詞があることです。これがパウロの言いたいことを私たちに明らかにしているのです。

1. 「古いもの」と「新しいもの」 = 二つの形容詞

「古いもの」とは「救われる前のあなたのすべて」です。イエスを信じて救いに与る前、新生するまで新しく生まれ変わるまで、あなた自身が持っていた人生の目的、目標、夢、また、人物への評価を含むこの世的な価値観、また、あなたが愛して来たもの、あなたの信仰などそのすべてのものです。つまり、救われる前の私たちはすべて自分中心でした。私たちが造ってくださった神などどうでもよかったのです。自分がすべての中心でした。

そういう「古いもの」、そして、「新しいもの」、対照的にこの二つが並んでいます。神を知らずに

生きて来た古いもの、そして、新しくされる、つまり、この救いに与ったそのことです。救われる前のすべてが新しくされるということです。

2. 「過ぎ去る」と「新しくなる」 = 二つの動詞

「古いものは過ぎ去って、」とあります。「過ぎ去る」とは「死ぬ」ということです。マタイ 24 : 35では「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」とあって、この「滅び去る」が同じことばです。また、Iヨハネ 2 : 17にも「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」、「滅び去り」と同じことばです。ですから、「過ぎ去る」とはまさに「滅び去る」ということで、かつての自分、神に逆らって来た自分は死んだということです。しかも、この「過ぎ去る」という動詞は不定過去形が使われています。実際にすでに起こったこと、また、すでに決着、完了したことを言っているのです。過去にこういうことがあったという事実を明らかにしているのです。ですから、パウロが言うことは、新しく生まれ変わった人とはこれまで神に逆らって来た自分が過去のいつかは分からないけれど、実際にそれは死んだのだということです。

そして、「すべてが新しくなりました。」とこの「なりました」という動詞は「生まれた、創造された」を意味することばで、これは完了形です。完了形とは過去に起こったことの結果が現在も継続していることを明らかにします。新しくされ、その新しい状態であり続けているということです。つまり、過去において神に逆らっていた者が全く新しくされて、そして、その新しくされた状態が今も継続しているということです。ですから、こうしてパウロは新生した人、本当に生まれ変わった人、救いに与った人は、これまで神を無視して自分中心に生きて来た自分が死んだこと、そして、全く新しい者へと造り変えられたと、そのように教えるのです。それが救われた者たちだと言います。

ですから、少なくとも、これだけを見るだけでも、新しく生まれ変わった人は今までとは異なる確実な変化が伴うということ、理解していただけましたか？今までの自分は死んだ、そして、新しく造り変えられた。その人の歩みに確実な変化が生まれて来るのです。

B. 新生の具体的な例 5章－6章の初め

パウロはここでその変化の具体的な例を挙げています。新しく生まれ変わった人の具体的な特徴です。信仰者に起こった生き方の六つの変化です。こういう点で、この六つの点においてその人が生まれ変わったとパウロは教えているので、今からそれを見ていきます。

1. 「栄光のからだを待望する者」へと変えられた 5 : 1－8

時間の関係ですべてのみことばを見ることはできませんが、5 : 1を見てください。この箇所をしっかりと見てください。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。」、「私たちの住まいである地上の幕屋」とは、私たちが持っているこの「からだ、肉体」のことです。そして、「神の下さる建物」とあります。これはこのからだは滅んだ後、神が私たちに約束してくださっている「栄光のからだ」のことです。こうして、「滅びるからだ」と「永遠に滅びることのないからだ」を対比するのです。しかも、パウロはこの「栄光のからだ」というのがどういうものか？二つの説明を加えています。

「栄光のからだ」とは : (1) 人の手によらない＝つまり、これは人間が努力をして得るものではなく神が私たちに与えてくださるものです。(2) 天にある永遠の家＝地上のからだは滅んでしましますが、天のからは永遠に滅ぶことがないのです。

変えられる前 : イエスを信じる前の私たちはこの地上のことだけを考えていました。パウロがこのように言っています。ピリピ 3 : 19「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」と。今日をどう楽しく生きるか、どのようにして自分を満足させるかと、そのことだけしか考えていませんでした。ですから、私たちはいろんなところからいろいろな情報を得て不安になるのです。老後のことを不安に思うのです。私たちが考えるのは今のこの地上のことだけです。だんだんからだ弱って来て死が近づいて来るというこの現実に対して私たちは大変な不安を抱きます。

でも、私たちがこの救いに与ることによって、確かにからだは弱って来ます、確かに肉体的な死は私たちに近づいて来ますが、でも、同時にそれは、私たちが待望している栄光のからだをいただく日が近づいているということです。イエスにお会いするその日が近づいているということです。

皆さん、多くの信仰者たちはこの希望をもってしっかり生きたのです。パウロが教えているのは、5 : 2「私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。」、5 : 4「確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。…」と、何のことを言っているのか？パウロたちはこの地上にあって大変な困難や苦しみを経験していたということです。言うまでもありません。パウロだけでなく多くの信仰者たちが、救いに与り信仰者として歩んだ地上の生活におい

て大変な迫害、大変な苦しみを経験しました。でも、彼らはその中で信仰を守り通したのです。そして、今で

も多くのクリスチャンたちが迫害されています。つい最近もアフリカの地において何人かのクリスチャンたちが殺害されたというニュースが届きました。

ですから、2千年前のことを言っているわけではありません。この人類の歴史を振り返ったときに、この新約の時代を見たときに、どの時代にあってもどの場所にあっても、クリスチャンたちは迫害され続けています。そんな迫害の中で彼らは信仰の妥協を選んだのか？そうではありませんね。彼らはその中にあっても信仰を守り通したのです。彼らは主に従い続けたのです。パウロが言うように「この幕屋にあってうめき、」、「この幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。」と、イエスを信じて従って行くというのは大変なことだ、大変な困難がそこにはあると言うのです。

少し飛んで13節を見てください。「もし私たちが気が狂っているとすれば、…」と書かれています。彼らはこのように人々から言われていたのです。こんなふうに彼らは中傷されていたのです。ですから、パウロたち信仰者はこのような迫害、苦しみがあっても主を崇めて主を信頼して主に従い続けたのです。周りの人々からはまさに気が狂ったように映ったのでしょうか。

では、なぜ、彼らはそのような迫害、困難の中でも主に従い通したのか？それが今私たちが見ている「永遠の希望」なのです。パウロたちが待望していたのは主が約束してくださったこの「永遠の祝福」です。「私は主とともに永遠を過ごす。私はこの罪のからだを脱ぎ捨てて栄光のからだをいただく。栄光の神とともに永遠を過ごす。」と、彼らは地上のことだけを考えたのではなくその先の永遠を見ていたのです。ですから、地上の生活を永遠という観点から見ると、砂浜の一粒の砂のようです。あっという間に終わってしまいます。ということは、この地上で主に仕えることができるのはほんの僅かの時間しかないということです。この地上において主に従っているクリスチャンたちひとり一人の人生の清算が成される日が来るのです。それを知っている彼らは今を無駄にしたくなかったのです。

皆さんが今どのような状況にいるのか分かりませんが、私たちが言えること、それは「すべて主がご存じ」で、そこにいるあなたを主はちゃんと覚えてあなたに助けをくださるし、感謝なことに、主ご自身が私たちのために祈り続けておられることです。こんなすべてにおいて完全なご配慮をしてくださっている神の御手の中に私たちは置かれているのです。地上の苦しみの中でもその先を見ていたパウロたち、どんな希望が私たちに約束されているのか？永遠が約束されている、私たちに栄光のからだは約束されている、その日を楽しみにしてこの日を生きたのです。

私たちにも必要なことです。地上においてイエスを信じるならすべての問題から解放されるなどと約束されていません。その逆です。でも、感謝なことは、その中にあっても主がともにいてくださること、主は真実なお方であること、約束されたことを必ず守られるお方であること、それらを通して私たちはそのことを学んでいくのです。忠実に主に従うことは決して無駄なこと、愚かなことではありません。それは主がお喜びになることです。

2. 「主を喜ばせることを喜びとする者」へ変えられた 9節

これが二つ目にパウロが教える「新しく生まれ変わった新生した人の特徴」です。

変えられる前 : これまでは自分を喜ばせることしか考えなかった。どうすれば自分は満足するか、どうすれば自分を喜ばせることができるか？と。士師記17:6には「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた。」とあります。また、エペソ2:3にも「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」とある通りです。

でも、救いに与ることによって今度は主を喜ばせる者として生まれ変わったのです。9節をご覧ください。「そういうわけで、肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」とあります。パウロは生きていようと死んでいようとそれはどうでもいい、私が望んでいることはただ一つ、主に喜んでいただくことだと言うのです。それが彼自身の喜びだったのです。私たちは生まれながらにだれ一人として神を喜ばせる者として歩んでいませんでした。なぜなら、救われるまで私たちが神を喜ばせる者になることは不可能だからです。ローマ8:8「肉にある者は神を喜ばせることができません。」、ヘブル11:6「信仰がなくしては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求めるときには報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」とみことばはこのように教えています。

神に背を向けている者がどのようにして神を喜ばせることができるでしょうか？彼らはそんなことをしないし、そんな思いすら持っていません。私たちが持っていたのはただどうすれば自分を満足させることができるかという思いだけです。でも、私たちは主のあわれみによってこの救いに与ることによって、何とか主に喜んでいただきたい、この新しい日を迎えるに当たって神が喜ぶことを選択したいと、

そのような願いを持って生きる者へと生まれ変わったのです。15節を見てください。主に喜ばれることを願って生きる、それは神が私にくださった救いの恵みを、また、日々の恵みを正しく理解したからです。

「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」、イエスが何のために十字架にお架かりになったのか？だれのために死んでくださったのか？あの苦しみはいったいだれのためだったのか？そのことを知った者たちは、その方のために生きていこうとします。何とかその方に喜んでもらいたいと…。

パウロはイエスの十字架が自分の罪であったことをよく理解していました。ですから、救いに与った後の彼の人生はどのように自分の感謝を現わしていくのか？と、そのことでした。感謝を現わす方法は、この方が喜ばれることを為していくことだ、それが「主のために生きる」という生き方であると、そのことを学びそのことを実践したのです。ですから、救われているかどうかというときに、このことを自分に問い掛けてみてください。私は本当に主に喜んでもらいたいというその思いをもってすべてのことをしているかどうか、教会で何かの奉仕をすることだけでなく、日々の生活においても、家事をするとき勉強をしているとき、すべてのことを何のためにしているのか？

今までは自分のためでした。会社で一生懸命働いて出世することが自分たちの夢でした。でも、救いに与った私たちは当然、主を愛するゆえに与えられたことを熱心に勤勉に為していくのですが、目的が変わったのです。自分が誉められることよりも神に喜んでいただきたいと、その新しい動機をもって私たちは生きようとしています。ちょうど、このパウロたちがそうであったように…。神に喜んでいただくことが私の喜びだと、そのことだけを願いながら生きていました。まさに、それは救いに与った、新しく生まれ変わった者の特徴です。

3. 「主を恐れる者」へと変えられた 11節

11節「こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているのです、人々を説得しようとするのです。…」、「主を恐れることを知っている」とあります。私たち人間の一番大きな問題は、私たちが造ってくださった創造主なる神に対する恐れが全くなかったということです。ローマ3：18には「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」（詩篇36：1「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。」）とあります。神を恐れぬゆえに私たちは好き勝手なことをして来たのです。見つからなければいい、捕まらなければそれでいいと。すべてをご覧になっている神がおられることを私たちは無視して来たのです。その方によってすべてのことがさばかれるという神の計画も無視しているのです。

神に対する恐れがない。でも、救いに与ることによって神に対する恐れをもって生きる者へと生まれ変わったのです。この「恐れる」と訳されていることばは確かに「怖い」ということですが、同時に、「畏敬、尊敬」という意味があります。「畏れ」は恐怖ではなく、特に、私たちクリスチャンの場合は「ここまで愛してくださる神を悲しませたくないという思いから、どんな悪をも避けて、主が喜ばれることを行い続ける生活を生み出す原動力」と言えます。このような生活をしているということはまさに神に対して畏敬の念を持っているということです。

神を恐れながら生きるということ、神は不可能なことを私たちに教えておられません。救いに与ることによって私たちはそのことを神から教えられるのです。ですから、イエスを信じた本当の信仰者は神を愛するゆえに、そして、その方を心から敬うゆえに、畏敬の念を抱いているゆえにこの方が悲しまれるようなことはしないで、却ってこの方が喜ばれることをしていくのです。

また同時に、この方はすべてをお造りになった神ゆえに、私たちが失ってはならないのは「神への畏れ」です。この方は私たちのすべてををご覧になっておられます。この方の前に私たちひとり一人例外なく立たされるその日が来るのです。少なくとも、神を全く恐れずに好き勝手な生活をして来た私たちは、救いに与ることによって、生まれ変わることによって、この方を恐れる者へと変えられる、そのことをパウロはこの箇所でお教えるのです。

4. 「主の愛によって生きる者」へと変えられた 14節

14節「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。…」、この「取り囲む」という動詞は「追い立てる、駆り立てる、促す、支配する」という意味です。ですから、パウロが言っていることは「キリストの愛が私を駆り立てる、私を支配して、私をまさに押し出している」、そういう働きをするということです。どのように？主のために生きていこう、主が託してくださった働きに専心していこうとします。人々がたとえ何と言おうと、どのように思おうと構わない、主に対して忠実に生きていこうと、そういう歩みに駆り立てる、それがこの「キリストの愛」だとパウロは説明するのです。しかも、この動詞は現在形を使っています。まさにその継続した生き方が続くということです。

かつての私たちはみな神の敵でした。神を愛するのではなく自分を愛してこの方に逆らって生きていました。そのような神の敵であった私たち、キリストの愛を拒んでいた者がキリストの愛に生きる者へと変えられたのです。「キリストへの愛」ではありません。「キリストの愛」がこのような働きを私たちのうちに為すのです。本当に救われた者たちは「キリストの愛」をいただいた。パウロは「その愛が私たちを押し出していく」と言います。こういうことをしなければいけない、しなければ救いを失ってしまう、これをするなら救いに与ると、そのようなことを言っているではありません。救いに与った者たちはキリストの愛にいただいているゆえに、その愛が私を追い立てていく、駆り立てていくということです。人が何と思おうと、主が私に託されたその責任、その務めをしっかりと果たしていく、その生き方が継続するのです。それがキリストの愛です。ですから、救いに与った人はそういう思いをもって生きるのです。ですから、自分に問い掛けてみてください。人が私のことをどう思おうとどう言おうと、主に従い続けていこう、主を喜ばせていこう、主が与えてくださった務めをしっかりと果たしていこうと、そのような思いがあるかどうか？です。

もしかすると、この中に「キリストを愛している人」はいるでしょう。問題は「キリストの愛」があるかどうかです。多くの人はキリストは立派な人だと思っているかもしれませんが。立派な人としてその人が好きでその人を愛しているかもしれませんが。でも、パウロが言うことは、キリストを愛することではなく「キリストの愛」があるかどうかです。あるなら、こういう働きを生み出していくとパウロが教えるのです。

20世紀の初めに、ロンドンのウェストミンスター・チャペルで牧会者であったキャンベル・モルガンはこのように言っています。「キリストの愛が私たちに注がれて（ローマ5：5「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」）強く迫って来る。畏れはこの愛とつながっている。それは、我々が愛を傷つけないようにとの畏れである。そして、この義務を果たすことの出来る唯一の道は、奉仕の道である。」と。主に対する畏敬の念、キリストの愛、今見て来たように、それが私たちを押し出しているのです。このような思いがキリストを傷つけないように、キリストを悲しませないように、そして、与えられた務めをしっかりと果たしていくように、そして、彼らは主に仕えていくということです。

「キリストの愛」をいただいた私たちはこの方に仕えることに関しては「もうこれで十分だろう」などと思いません。もっと主のために何かしたいと思えます。それは主が私たちにしてくださったことを考えてください。主はすべてを犠牲にしてくださった。その愛をいただいた私たちには、感謝なことに主の愛が私たちのうちにも同じ働きをしてくださるのです。ですから、クリスチャンは主に仕えることに対してリタイアがないのです。天に上がるまで、神が「よし」と言われるそのときまで私たちは現役として神に仕え続けていくのです。なぜなら、キリストの愛が私たちをそのような働きへと押し出していくからです。

5. 「主の価値観を持つ者」へと変えられた 16節

16節「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」、救いに与ることによって、新しく生まれ変わることによって、神の前に価値あることが自分にとっても価値あるものとなったということです。

○永遠の価値がないものを自慢しない

救われる前はこの世の価値観をもって生きていました。ですから、永遠に価値のないものを私たちは一生懸命自慢していたのです。教養というものを自慢したかもしれない、自分の富、自分の社会的地位を自慢したかもしれない。世界には人種を自慢する、国籍を自慢する人もいるでしょう。社会的地位や富や財産や肩書や家系や職業などを自慢し、そして、私たちもそれらをもって人を評価して来ました。たとえば、私たちが「あの人は立派な人」と口にするとき何を基準に評価しているのでしょうか？この世的な価値によって人をえこひいきしたり差別などをしてしまう。「あの人は立派な人だ。でも、この人はそうではない。」と。

憶えていますか？ヤコブはこんなことを言っています。ヤコブ書2：1-9「1 私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。2 あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな服装をした人が入って来、またみすぼらしい服装をした貧しい人も入って来たとき、3 あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、「あなたは、こちらの良い席におすわりなさい」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい」と言うのであれば、4 あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったではありませんか。5 よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。6 それなの

に、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです。あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。:7 あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。:8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いはりっぱです。:9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。」

他にも、Iヨハネ2:16「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」、エペソ6:9「主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。」とあります。

私たちは救いに与ることによって、新しく生まれ変わることによって、かつて持っていたその価値観を捨てたのです。神の価値観で生きるのです。神の前にいったい何が価値あるのか？その考えに基づいて歩む者へと私たちは変えられたのです。この世的な偏見や差別をもって生きて来た私はもう死んだのです。そのことによって私たちは気付きました。この世には二種類の人しか存在しないと。「罪の赦しをいただいた人」と「罪の赦しを拒み続けている人」、この二種類です。人種などどうでもいいし、肌の色などどうでもいい、教養があるない、社会的地位、財産のあるなし、どうでもいいことです。この世には二種類の人しかいません。神が備えた救いを心から受け入れた人と、それを拒み続けている人、この二種類です。

ですから、私たちは罪の赦しをいただいた人に対してその人たちを「兄弟姉妹」と言います。神の家族の一員だからです。ですから、私たちは家族の一員として互いに愛し合っていくのです。罪の赦しを拒んでいる人に対しては、主の恵みを愛をもって宣べ伝えていきます。そのような対象です。ですから、兄弟姉妹に対してはキリストの愛をもって互いに愛し合っていく、キリストを知らない人に対してはこのキリストのすばらしい救いを愛をもって伝え続けていくのです。私たちはみな神の家族だと、今までの価値観を全く捨てて、神がご覧になるように私たちは見るのです。

イエスが地上におられたときにイエスが訪問されたところは、その当時の宗教家たちからすれば決して訪問しないところでした。「なぜ、あなたがたの先生はあのような罪人のところに行って彼らとしゃべり食事をするのか？」と非難しました。イエスの目には二つでした。神を愛する者と神を愛さない者と…。

6. 「主を証する者」へと変えられた 5:18-6:2

最後に、新しく生まれ変わることによって何が起こったのか？「主を証する者」へと変えられたということ。新しい使命をもって生きるのです。18節からご覧ください。

1) 主は罪のさばきの代わりに和解を与えてくださった 18a節

「:18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、」、まず、このみことばは私たちに「主は罪のさばきの代わりに和解を与えてくださった」と、キリストによって私たちをご自分と和解させてくださった、救いに与ったということです。神に逆らっていた神の敵であった者が主に罪赦されて神と和解したと言うのです。ローマ5:10-11に「:10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。:11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」

2) 主は和解の務めを与えてくださった 18b節

そのことを語った後、18節にこう続きます。「また和解の務めを私たちに与えてくださいました。」と。救いに与った者に神は和解の務めをくださったのです。少し飛ばして20節をご覧ください。「:20 こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。…」、「使節」とは私たちは余り使わないことばですが、これは「国や政府の代表として派遣される人」のことです。その中で「大使」というのは「最上位の使節」です。昔なら朝廷や幕府から公的任務を帯びて派遣される使者のことです。

ということは、パウロはここで私たちクリスチャン、神と和解して救いに与った者たち、新しく生まれ変わった者たちは、キリストから代表として派遣された者たちだと言うのです。イエスによってあなたは代表として派遣されたのです。何のために？キリストのメッセージを伝えるためにです。使節、大使がその国を代表して遣わされるように、あなたも私も、この救いに与った者たちはまさに神の国を代表して、このすばらしいキリストを宣べ伝えるために遣わされた者です。

そして、この後を見てください。「…ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」、私たちはキリストの使節なのだ、キリストから遣わされた大使なのだ、「ちょうど神が私たちを通して懇願しておられる」と私たちは神

に代わって人々に懇願するのです、「神の和解を受け入れなさい。」と。神に代わって私たちは神のメッセージを伝えるのです。神に代わって神が望んでおられることを私たちは人々に伝えるのです。「罪の赦しをいただきなさい。罪を悔い改めて神と和解しなさい。」と。6：1には「私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。」とあります。2節にも「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」と書かれています。

私たちは神とともに働く者たちです。神が私たちを遣わしてくださる、神のメッセージを伝えるために、そして、その働きにおいて神ご自身も私たちとともに働いてくださるのです。これが新しく生まれ変わった私たちに神がくださったすばらしい祝福なのです。そして、このような働きをする者として、私たちは生まれ変わったのです。

パウロは六つのことを教えてくれました。見て来たように、私たちは栄光のからだをいただく、そのことを待望しながら生きる。たとえ、どんなことが起こったとしても私たちは永遠をしっかりと覚えながら主に従い続けるのです。私たちは主を喜ばせることを喜びとする者へと生まれ変わった、神が喜んでくださればそれでいいと。同時に、私たちは主を恐れる者として生まれ変わりました。何とかこの方が喜ばれることを行っていきたい。この方が悲しまれることから離れて行きたいと。また、主の愛によって生きる者へと生まれ変わりました。私の中にキリストの愛があり、その愛が私を押し出していく。キリストに喜ばれる歩みをするようにと。また、これまでのこの世的な価値観ではなく主の価値観をもって生きる者へと変わった。今までの価値観で物を見ないのです。今までの価値観で世的なものを一生懸命求めようとするようなことは終わったのです。そして、「主を証する者」へと変えられました。

皆さん、今この六つのことを見て、あなた自身の信仰が本物かどうか、その確証を得られたでしょうか？パウロがここで私たちに教えてくれていることを見て来ました。救いに与って新しく生まれ変わった人は新しい歩みを始めるということです。私たちは生まれ変わるのです。あなたの心の中にこのような願いがあるかどうか？あなたはこういう願いによって歩んでいるかどうか？そうなら、救われた者にふさわしく生きていくことです。新しい人生を得た者としてこの1年の歩みをしっかりスタートされることです。

少し前ですが、1858年、フランシス・ハーバガルは眼の治療のためにドイツに渡ったお父さんといっしょにドイツにいました。牧師の家を訪問したときに彼女は一枚の絵を見ました。それはイエスの十字架の絵でした。そこには「わたしはあなたのためにこれを為した。あなたはわたしのために何を為したのか」と書かれていました。そして、彼女が詩を書いて誕生したのが、恐らく皆さんもよくご存じの讃美歌332「主はいのちを与えませり」です。私が大好きな曲だと以前にも話したと記憶していますが、もう一度その歌詞を読むことを許していただきたいと思います。

讃美歌332

1. 主はいのちを与えませり 主は血しおを流しませり
その死によりてぞわれは生きぬ
われ何をなして主に報いし
2. 主は御父のもとを離れ わびしき世に住みたまえり
かくもわがために栄を捨つ
われは主のために何を捨てし
3. 主は赦しと慈しみと 救いをもて下りませり
豊けき賜物 身にぞ余る
ただ身と霊とを捧げまつらん

大変すばらしい訳がされています。彼女が言いたかったこと、1番で「主は言われます。わたしは与えた。わたしのいのちをあなたに与えた。あなたはわたしに何を与えてくれたのか」、2番「わたしはすべてをあなたのために捨てた。あなたはわたしのために何かを捨ててくれたのか。」、3番では「わたしはあなたのために大変苦しんでいる。あなたのことばでは言い表せない苦しみを。あなたを地獄から救い出すために最も激しい苦しみをわたしは耐えた。わたしはあなたのためにそのすべてを耐えた。あなたはわたしのために何を耐えてくれたのか。」

この曲の日本語のタイトルは「主はいのちを与えませり」です。でも、彼女が書いたときのタイトルは「わたしはいのちをあなたにささげます」でした。彼女は病弱でしたから43歳で天に召されます。そのときまでこの純粋な信仰をもって主に従い続けたのです。主の恵みをいただいた者たち、救いに与った者たち、新しく生まれ変わったならそれにふさわしく生きることです。こんなすばらしい救いをくださった神のすばらしさを伝えるという特権を神は私たちにくださった。あなたはキリストの大使だと言います。キリストから遣わされた使者である、キリストを代表してそれにふさわしい働きをしている

のかどうか、そのことは私たちひとり一人が自分自身に問い掛けなければならないことです。でも、少なくとも、自分自身も、パウロがそうであったように、また、フランシス・ハーバガルもそうであったように、残された時間をこのように生きていきたいと思います。天を見上げて、永遠をしっかりと覚えて、そして、与えられた一日一日を主に喜んでいただくことだけを願いながら、そのように生きていきたいです。あなたはいかがでしょう？